

公開シンポジウム

『鳥の種分化と種分類 -日本列島の鳥の系統学からの発展-』

日時：9月19日（月） 15時～18時

場所：大阪市立大学全学共通教育棟 810 教室

企画者：西海功（国立科学博物館）・高木昌興（大阪市立大学大学院）

2012年の鳥学会創立100周年に向けて鳥類目録の改訂が進められている。大きな変更と修正が加えられるのは、掲載種の増加、大分類の変更と併せて、種分類の見直し（種の細分化）となりそうである。種分類の見直しが必要な理由には、20世紀中頃から後半に流行した併合主義を維持してきた日本鳥類目録に対して、世界の鳥類目録の多くが近年は細分主義を好むため、両者に多くの齟齬が生じていることが挙げられる。細分主義は保全の観点から望まれるし、またDNAデータの蓄積によって系統学的種が次々と見つけられていることも細分主義の流行に影響している。DNAバーコーディングは種を同定するためのツールで、種を分けるためのものではないが、バーコーディングにより世界の鳥のDNA分析が急速に進むことから細分化に拍車がかかろうとしている。そのような中であって、日本とその周辺での鳥の系統学とそこからの発展としての音声、行動あるいは形態に関する集団分化と進化の研究について5名の演者に話してもらい、今一度立ち止まって種分化と種分類を考えるきっかけとしたい。

S1: はじめに -DNA バーコーディングと日本の鳥の種分類-

西海 功（国立科学博物館）

S2: 古くに分岐した3種の隠蔽種からなるメボソムシクイ -日本産繁殖鳥類種の分類再検討の一例として-

齋藤武馬（山階鳥類研究所）

S3: 北半球に分布する大型カモメ類の遺伝的特徴

長谷川理（エコ・ネットワーク）

S4: 危急種アホウドリは2種からなる?! -遺跡試料を用いた集団構造の復原からみえてきたこと-

江田真毅（鳥取大学医学部）

S5: 種分化の加速と減速 -オサハシブトガラスの人為環境への適応を例として-

山崎剛史（山階鳥類研究所）

司会：高木昌興